

「六古窯をシルバーカレッジの窯で焼いてみる」

コース・専攻：総合芸術コース 美術・工芸専攻

グループ名：Camarade

メンバー：岸本雄二、井上明則、中島雅一、内田厚子、内田裕幸

1. 趣旨・目的（テーマ設定の目的）

六古窯（越前焼、瀬戸焼、常滑焼、信楽焼、丹波焼、備前焼）の陶芸は、日本古来（鎌倉時代～平安時代）から、日本人の生活の中で息づき、生活に生かした陶器を作り出し続けている。これら陶器をシルバーカレッジでの窯で焼いてみたいと願う5名が仲間となってグループ学習のテーマに選定した。

2. 調査方法

- インターネット、本等の文献調査から開始し各古窯に赴き、フィールドワークを実施した。文献調査及びフィールドワークの結果から、今回使用する粘土、釉薬を選定し、どんな作品を作陶するかイメージを膨らませた。
- これらの成果をベースに、各自作陶する作品を選定し、まずは、ミニチュア版を作成し、最終的に本格的な作品を完成させるアプローチを試みた。

3. 学習したこと

- 旅する、千年、六古窯は今も人々の生活に息づいている。
- 六古窯の発達には、土、木、人、丘陵、河川、海が共通している。
- 陶芸体験を通じて、各窯元（かまもと）で作陶している方々の情熱を感じることができた。



4. 結論（感想を含む）

- ① 六古窯を学ぶと大風呂敷を広げたが、千年の歴史を学ぶことは無理であり、ほとんどのことは理解できなかったかもしれないが、フィールドワークにおいて陶芸に携わっている方々の並々ならぬ情熱、思いに触れることができて大切な時間を過ごし、経験をさせていただいたことに感謝している。
- ② 陶芸は難しい。思うように作陶できないし、半磁土はすぐに割れる。釉薬も思い通りの色にならないし、「もういやや、やめる。」と思ったことは何度もあったけど、あきらめないで良かった。
- ③ グループカマラッド5名が同じテーマの学習に取り組み、苦手なこと、得意なこと色々あったが、お互いカバーしながら、一つ一つ課題を克服できたことは大きな成果であり、5名での様々な打合せや資料読み合わせ、試作を繰り返したことは、今となっては楽しい思い出となった。

以上